

未来を拓く細川林谷記念館

教育・昭和 51 年卒・細川林谷記念館館長 細川 信晃

1 細川林谷とは

細川林谷は、天明 2 年（1782）寒川郡石田東村森弘（現さぬき市寒川町石田東森広）で、細川義平の次男として生まれました。幼くして阿部良山（現高松市六条町）に篆刻を学ぶとともに、良山の教えにより讃岐を代表する南画家の長町竹石と漢詩人・書家の後藤漆谷の元で詩・書・画を学びました。林谷は、3 人の巨匠の指導により、「詩・書・画・篆刻」の技を磨き、めきめきと上達しました。字は瘦仙、林道人、忍冬庵、三生翁、白髪小児、不可刻斎、有竹等の号があります。

林谷は、文化 12 年（1815）34 歳頃江戸で門戸を構え、当時「江戸で一、二を争う篆刻家」と評判になりましたが、利に淡く、篆刻の依頼があっても、気が向かなければ容易に彫らなかつたようです。また探奇の志が有り、飄然と故郷を後にして、度々遊歴の旅に出ました。その足跡は、北は東北から南は九州まで全国に及びました。さらに林谷は、「竹には吾命が宿る」と言うほど最も竹を愛し、竹に関する詩を百首余り詠んでいます。旅の途中に珍しい竹があれば必ず足を止め、その竹がほしいと懇願するほどでした。天保 13 年（1842）、江戸三味線堀の寓居にて 61 歳の生涯を閉じました。（林谷の生卒年には、諸説あり）

2 細川林谷顕彰の歩み

故郷（石田）における林谷顕彰の動きは、明治時代まで遡ることができます。その中心となったのは、林谷と同郷に生まれた飯田為三郎氏（米峰）はじめ、石田神社宮司の三浦熊三氏、石田村長の有馬清平氏ら地元有志の方々です。紆余曲折を乗り越え、昭和 18 年（1943）に、石田村の林谷生家跡に「林谷山人生地之碑」を建立するとともに、昭和 58 年（1983）寒川町長の児玉勇一氏はじめ林谷崇敬者により、寒川町 B & G 海洋センターの落成を期に同所に「林谷山人之碑」が、また、石田光明寺にある父義平の墓の隣に「細川林谷山人之墓」が建立されました。このように林谷顕彰の動きは、地元で脈々と受け継がれてきました。

3 細川林谷記念館の果たす役割と期待

令和 6 年（2024）、細川林谷の兄の子孫である細川勝博氏その子周作氏の篤志により、林谷誕生の地であるさぬき市寒川町石田に細川林谷記念館が開館し、ようやく林谷顕彰の中核となる施設が整備されるに至りました。

当館は、林谷顕彰のための林谷展示室だけでなく、さぬき市民の芸術・文化振興の拠点としての役割も担っており、各種文化団体の作品展示のための市民ギャラリーや絵画・書道等の創作活動のための講座室を併設しています。今後とも、さぬき市民の豊かな人生を支えることのできる館として、一層、充実・発展させていきたいと考えております。